

母子感染予防について

岩手医科大学附属病院
慢性疾患看護専門看護師
三浦 幸枝

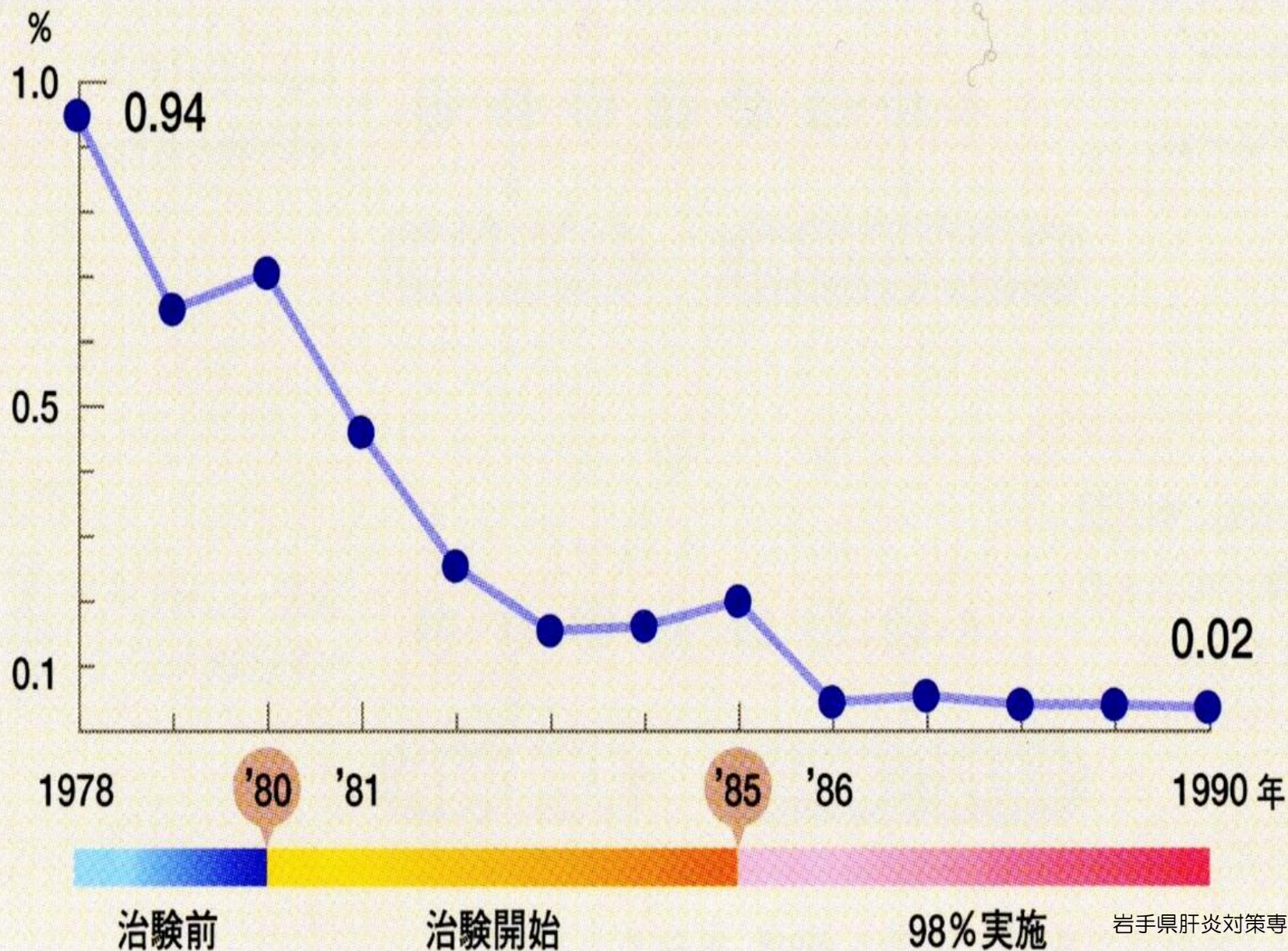
日本のB型肝炎対策

1972年	血液製剤スクリーニング開始
1984年	血漿由来B型肝炎ワクチン承認
1986年	母子感染防止事業開始
1988年	組み換えB型肝炎ワクチン承認

B型肝炎の予防対策

- 昭和60（1985）年よりB型肝炎母子感染防止対策事業が開始され、HBs抗原陽性の妊婦から出生した乳児へのB型肝炎ワクチン接種（抗HBs人免疫グロブリンとの併用）が実施され、母子感染によるキャリア化は著しく低下した。

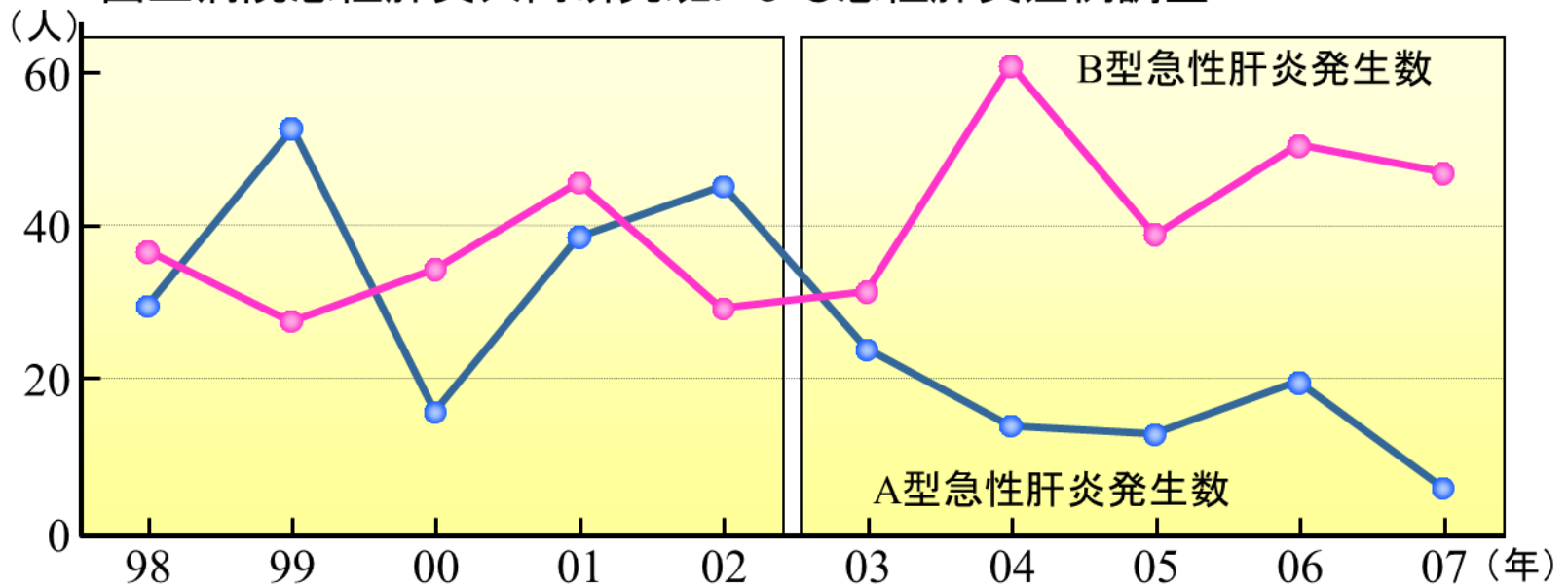
学童におけるHBVキャリア率「HBV母子感染予防事業」の効果



B型肝炎の発生数の変化

母子感染防止事業が開始された1985年以降も、
B型急性肝炎の発生率が増加している

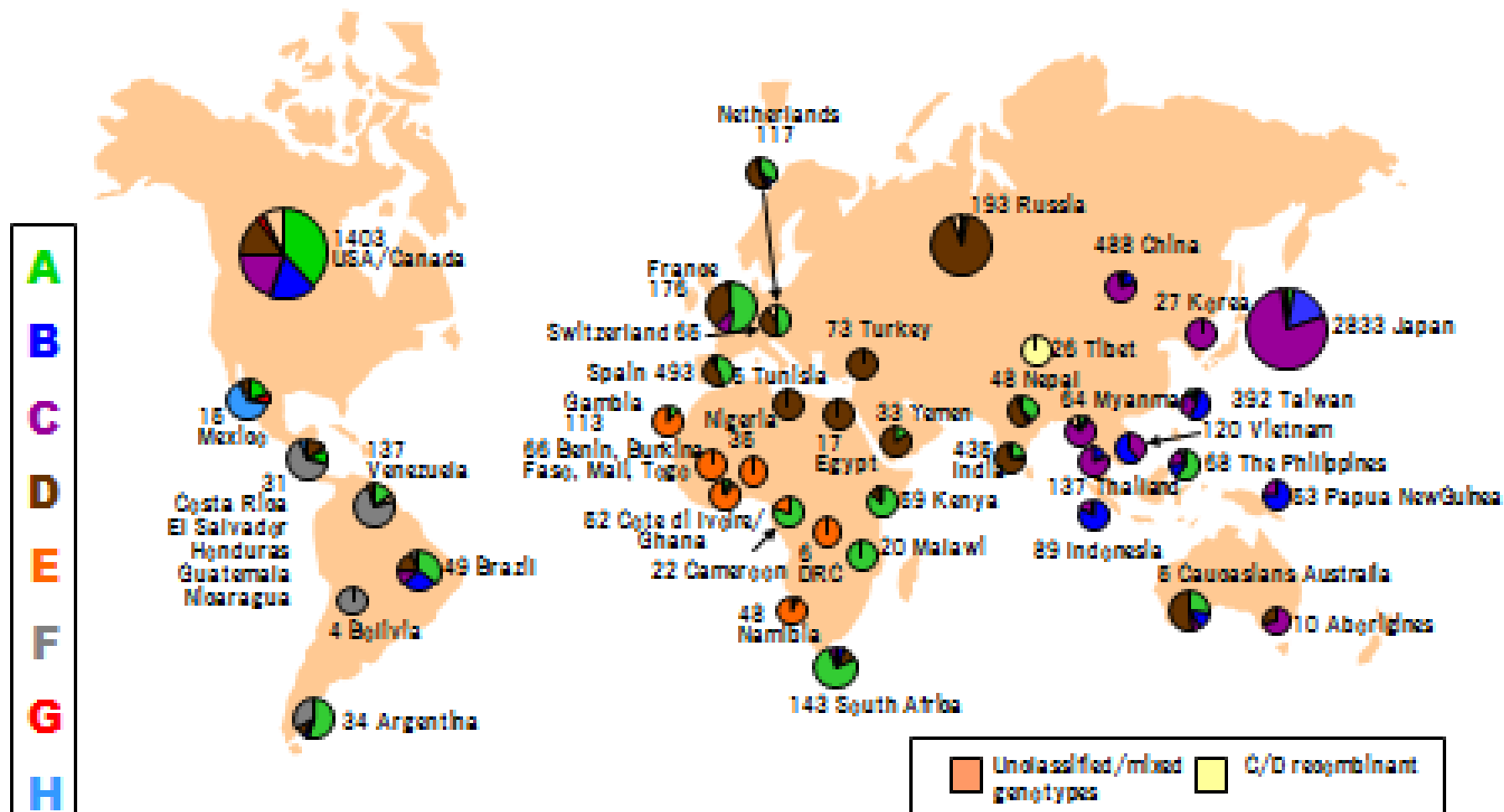
国立病院急性肝炎共同研究班による急性肝炎症例調査



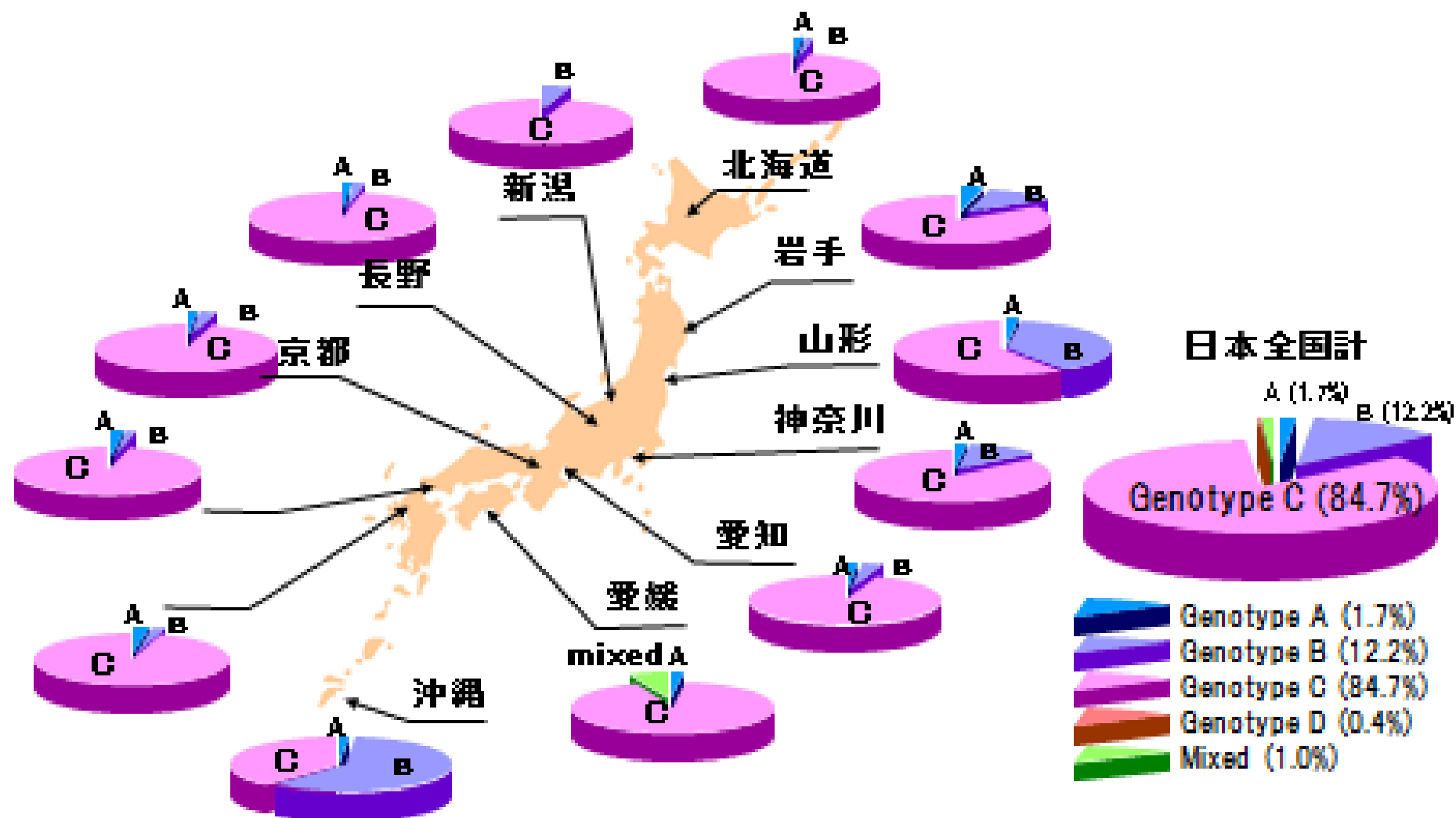
日本でのB型肝炎ウイルス感染の現状

1. 母子感染防止事業開始後もHBV感染症（特にB型急性肝炎患者が減少していない）
2. 海外型であるジェノタイプAが増加しており急性肝炎の慢性化率が増加すると予想されている
3. 父子感染やその他の感染経路によるHBV感染が存在する
4. 世界では母子感染だけでなく、水平感染予防も含めたHBV感染予防策としてユニバーサルワクチネーションが行われているが日本では導入されていない

B型肝炎ウイルスジェノタイプ分布図



HBVジェノタイプの国内分布



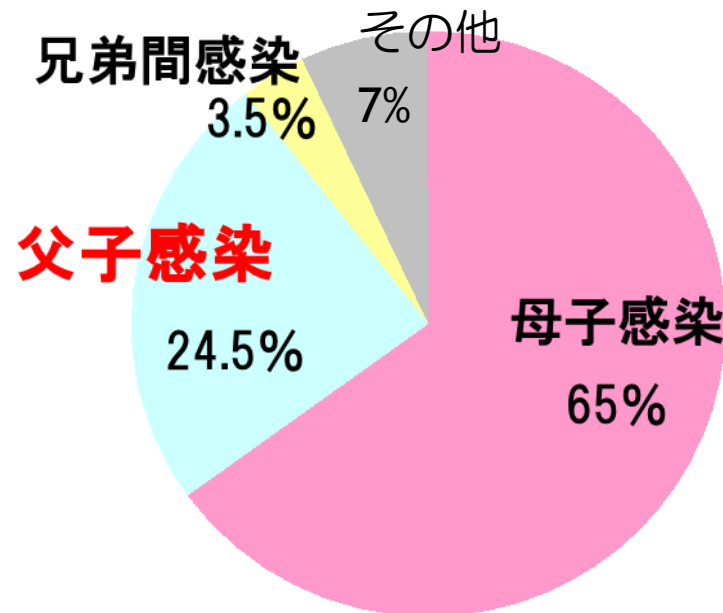
小児B型肝炎ウイルス感染症の背景

父子感染・その他の家族内感染によるHBVキャリア化が目立つようになった

母子感染防止事業開始後、1986～2008年に生まれたB型慢性肝炎

小児57人の感染経路

平均年齢9.8歳

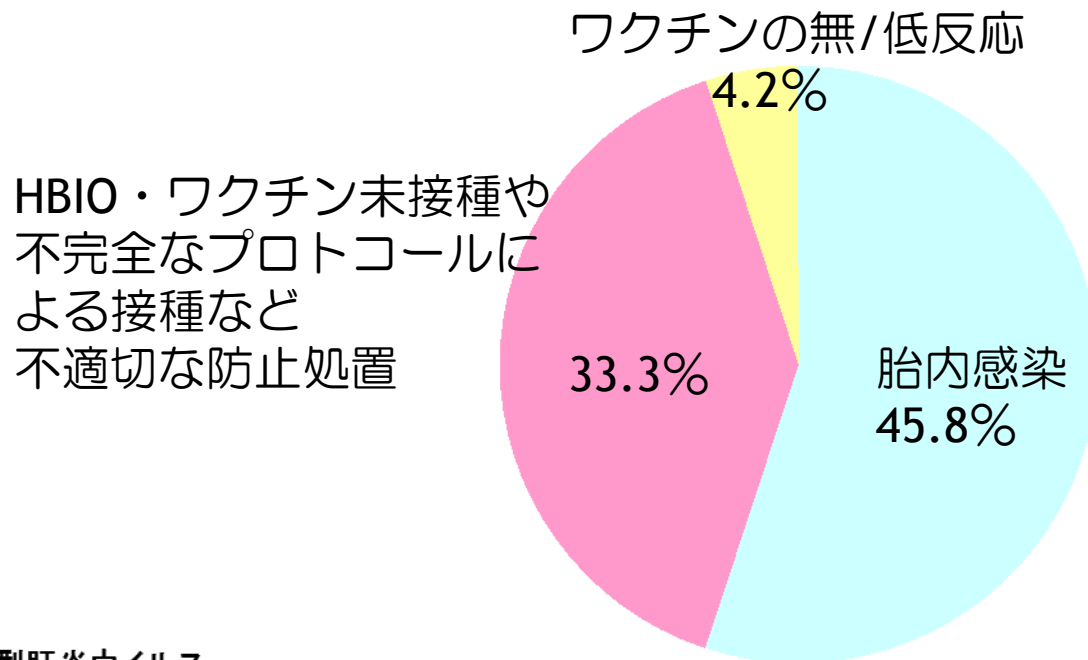


- 小児では、母子感染以外の感染経路が、35%を占めている
- 水平感染した小児全員がHBVワクチンを接種していなかった

小児B型肝炎ウイルス母子感染の原因

不適切な感染防止処置による感染例が多い

母子感染防止事業開始以降、1998～2003年に生まれた48人の小児HBV母子感染の原因



HBV: B型肝炎ウイルス
HBIG: 抗HBs人免疫グロブリン

- 胎内感染
- 妊婦検診時の漏れ
- 社会環境の変化⇒男性の育児への参加
(家庭内の水平感染)

- HBV母子感染予防法の不徹底
プログラムの不完全実施

女性の社会への進出
煩雑な接種法と検査

乳幼児の感染は減っていない

母親のB型肝炎ワクチンの認知度

- B型肝炎ワクチンは、**任意接種**のワクチン
- 同じ任意接種でもみずぼうそうやおたふくかぜワクチンは多くの保護者の方々に知られている。
- B型肝炎ワクチンはあまりなじみのないワクチンと言える。

HBs抗原検査

妊娠初期の全妊婦に行う

—

非感染

+

感染

HBs抗原検査

—

ローリスク郡

HBs抗原(+)
HBe抗原(—)



児に対する
感染予防対策

+

ハイリスク郡

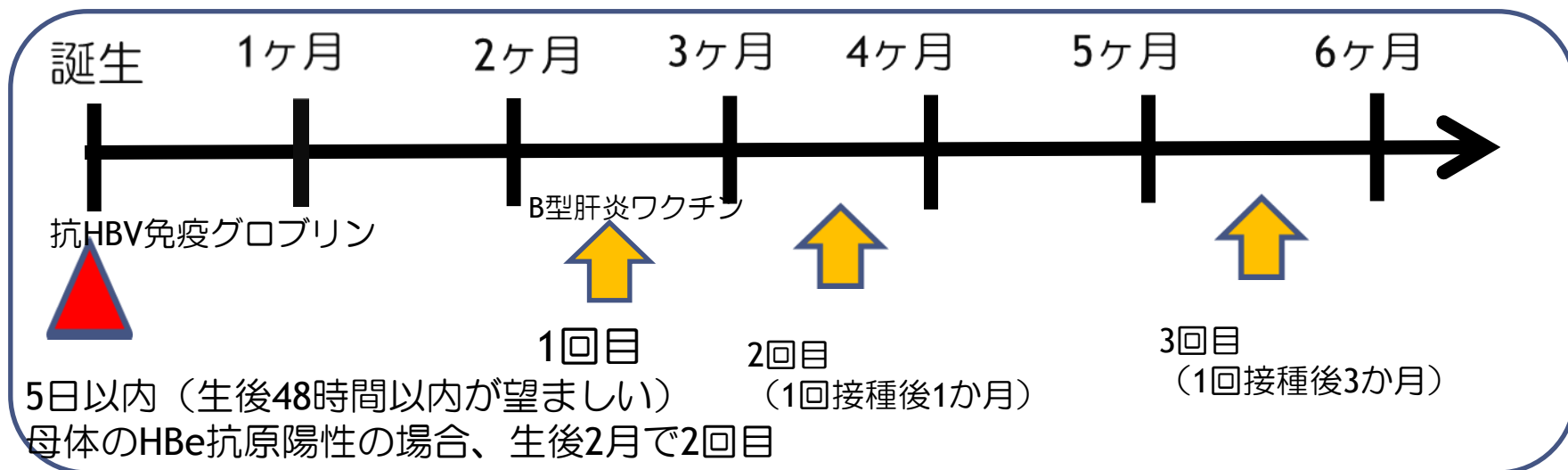
HBs抗原(+)
HBe抗原(+)



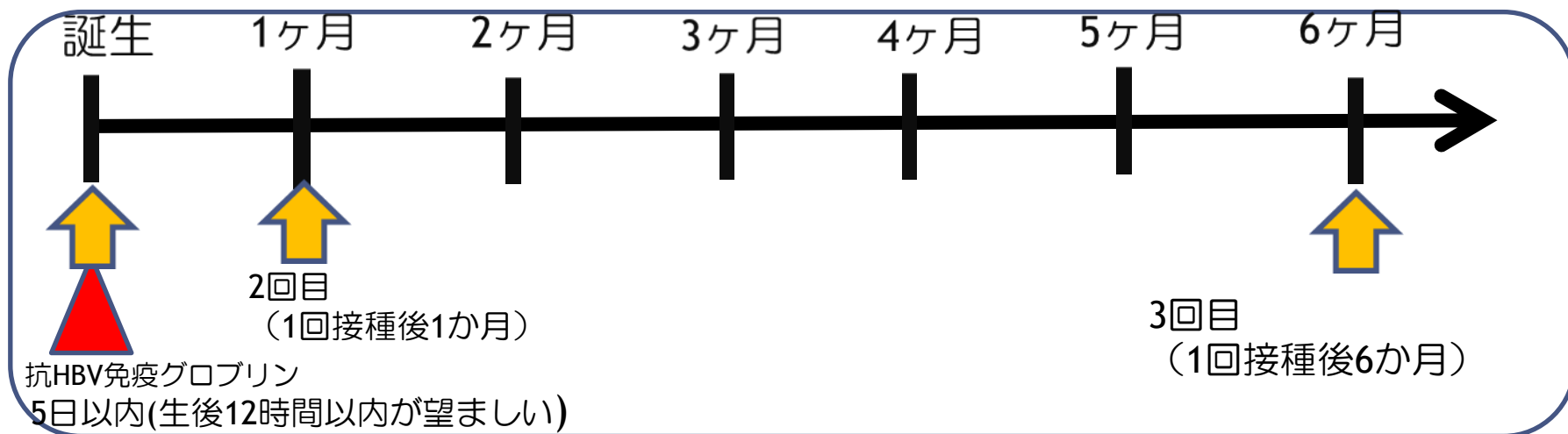
児に対する
強力な
感染予防対策

B型肝炎ウイルスの母子感染予防スケジュール

現行



一変承認後



B型肝炎ワクチンの適応

① 母子感染予防法

HBs抗原陽性の母親から生まれた児

②ハイリスク集団

患者と濃厚接触がある者（家族・パートナー）

HBV キャリアを配偶者とする人、

HBV キャリアと同居する人

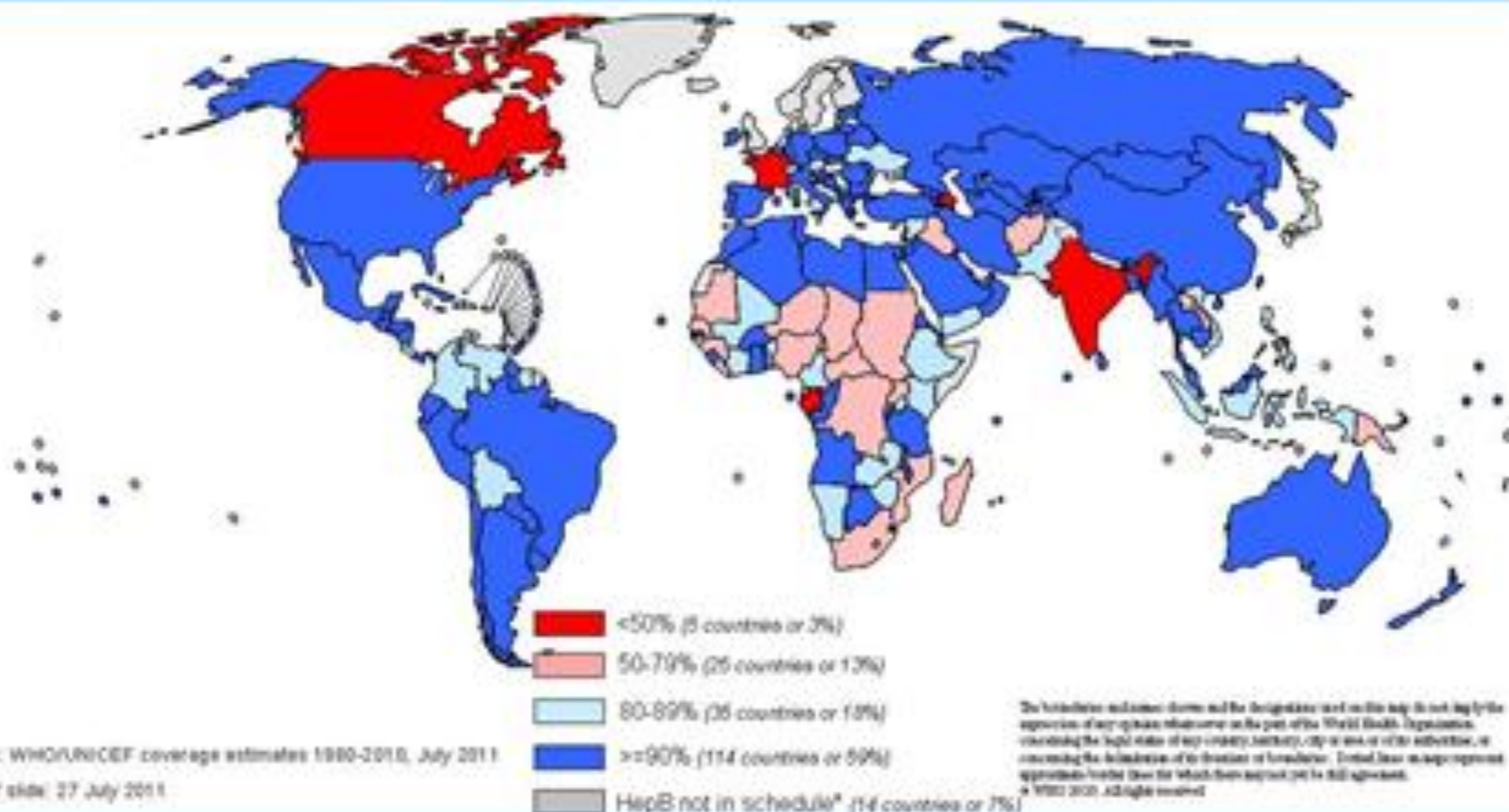
医療従事者

透析患者 消防士 救命救急士 警察官

海外長期滞在者

ユニバーサルワクチネーション
-2010年時点、世界179カ国で実施-

Immunization coverage with 3rd dose of HepB vaccines in
infants, 2010



日本でのユニバーサルワクチネーションの必要性

- B型肝炎をクチンのユニバーサルワクチネーション実施により、世界におけるHBV感染症は近い将来、激減することが予想される。
- 日本におけるHBV感染症は減少の兆しがない。
- 日本のHBV感染疫学に近年変化がみられるため、従来の予防策では十分とは言えない。
- 全新生児を対象とするユニバーサルワクチネーションは家族感染を防ぐだけでなく、性感染症としての水平感染も予防できる。

日本でもユニバーサルワクチネーションの導入を検討するべきであるとの議論がある¹⁻³

参考文献

- 1)厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会 ワクチン評価に関する
小委員会報告書
- 2) 白木和夫：小児内科 2007；39：P1878～P1881
小児科診療 2009；12：P2333～2338
- 3)中田靖人他：肝臓 2009；50：P598～P604
- 4)藤沢卓彌他：日本小児科学会雑誌 2005；109：P363～P369
- 5)矢野公士他：臨床と研究 2008；85（7）P914～941
- 6)山田典栄他：肝臓 2008；49：P553～P559